

## あとがき

### 有機農業に未来の光を見る

岳陽新聞社 主筆 鈴木清貴

戦後の大量消費大量生産時代に適応した生産性(収量)重視の農薬・化学肥料大量投与によって日本の大地「農地」は再生不能状態にまで荒廃している。

かつての伝統的な循環型有機農法は、自然のサイクルに従った大地のエネルギーを作物づくりに活用する生産を通じてミネラルやビタミン類の豊富な自然の生命力をいただいた野菜が人々の食卓を豊かにし、人々は「旬」という季節の味を食することで健康な食生活を営んできた。

戦後に全国の農地で大量に農薬や化学肥料を投入する農業が行われ、見かけが整い収量が多い種(F1)などの栽培で在来作物が姿を消すなど農業経営の環境崩壊が進み、大地の恵みの環境変化を見逃してきたことは否めない。「健康環境」とも言うべき人間にとって基本となるべき環境要因が大きく崩れている。

富士宮では、里山づくりにより地域を挙げて広葉樹の森を築くために植林を続け先駆的に取り組んでいるNPO法人もある。本格的な有機農業で栽培収穫したものを消費者に提供して富士山

麓を「有機の郷(有機農業の発信基地)」にしようと取り組んでいる若者たちがいる。有機農業に挑戦する若者たちは「富士山麓有機農業推進協議会」に集い、連携してネットワークを広げている。若者や新規就農予備軍の育成に努めている有機農業予備校での学びを生かして新たに農業従事者となった若者もいる。

大量消費大量生産時代に適応した大量の化学肥料投与と農薬を撒き散らして畑の環境を整えてきた戦後農業で、化学肥料を使えなければ作物が育たない畑や強い農薬を使わないと効果が無くなるような畑が築かれてきた日本の農地は、生物の育成のみならず人間の本能(種の保存)までも狂わせてしまっている。

「取り返しのないところまで破壊されてきた農地や里山を取り戻すこと、自然循環の国土を取り返すこと」は喫緊の課題となっている。食の安全安心だけではなく、土があらゆる生物の命を循環させる活力を蘇らせ命の連鎖とも言うべき自然のサイクルに従った生物環境を取り戻す「大地をよみがえらせる・農地再生」が有機農業に期待されている。

本紙に連載いただいた宮下さん編集のシリーズ『農民の履歴書』などは、「新たな農業開拓者」たちを紹介するものとして好評を博した。これらをまとめたこの冊子『農民の履歴書』は有機農業に未来の光を見るバイブルともなるであろう。

### 農民の履歴書

発行：平成29年3月30日

編集：富士山麓有機農業推進協議会

表紙デザイン：ファームハーモニア 鈴木 一正

協力：岳陽新聞社

印刷：エース出版企画 編者：芦澤 幹雄

この冊子に関するお問い合わせ：宮下 亮太  
e-mail:ryota2505@gmail.com